



発行責任者 熊田順一郎
本号編集責任者 佐藤 克浩

巻頭言

「教員の働き方改革を考える」

須賀川市教育委員会教育長職務代理者 佐浦 雅明

須賀川剣道連少年部の稽古に度々通ってくる高校生がいる。教員を目指し教育系の大学を受験するという。推薦入試に与えられたプレゼンのテーマが「部活動の地域移行について」。夏休み中、一緒にテーマについて検討し、須賀川市教育委員会指導主事に須賀川市の状況を聞いた。彼が教員を目指す理由は、「小学校の時の先生にすごく影響を受けたから。」だそうである。中学校教員は目指さないのか尋ねると、「部活動指導はしてみたい。」のだそうである。

夏休み中に須賀川市教育センター研修講座を3つ受講した。「授業の質を目指して1」「学校の働き方改革の現状と課題」、そして「学校文化の問い直し」である。また、8月末には福島県市町村教育委員会連絡協議会「教育委員・教育長研修会」に参加し、「教員の働き方改革に関すること」についてグループディスカッションをしてきた。

これら一連の経験は「教員の働き方改革」について考える機会になった。「教育委員・教育長研修会」では教職経験者ではない方から、「先生方は働きすぎで大変だと感じる。ご自分の御家庭は大丈夫なのか」、「私の町では議会で教員の働き過ぎが議題に上ることがある。」、「先生方には学力向上のための授業をしっかりと進めてもらい、子供たちの悩みに丁寧に対応してもらいたい。」という意見をうかがった。

須賀川市でも様々な取り組みを実施し、残業時間が徐々に減っている。一方、職場の同調圧力はまだまだ強いようで、「自分一人だけ帰るわけにいかない。」と考える先生方も多いようである。校長経験者としては、「仕事をやめて早く帰れ。」は仕事量が変わらぬ中では、新たな同調圧力になるだけだろうと思う。帰りたい人は遠慮なく帰れ、仕事をやりたい人はある程度許されるのが理想ではないかと思う。授業準備や生徒の悩みに丁寧に対応していれば、勤務時間内で終わらないこともあるはずである。夏休み中の研修会では参加された先生方が、それぞれの立場に立ちながら遠慮無く意見を出していた。こうした姿は先生方が主体的に解決していこうとする意識が高まっている表れだと思う。校内でも活発に議論して欲しいものである。「教育委員・教育長研修会」で話し合っているとき感じたことがある。教職経験者の方が働き方改革に慎重なのである。現場の課題が多く、簡単にいかないことがわかっていて、また自分の経験した教師像にとらわれてしまうこともある。働き方改革は絶対必要であるから、できることから少しでも積み重ねていかなければならない。そしてこれを判断し、実行できるのはやはり校長先生であろうと思う。

最初に紹介した高校生の言葉は、最近の教員のなり手不足は「教員に憧れる児童・生徒」が減っていることを意味していないだろうか。教員志望の動機は「先生に憧れて」であって欲しいとも願う。しかし、いつも忙しそうでゆとりのない教員の姿に、親しみを感じ憧れる児童・生徒はいないであろう。時間的にも精神的にもゆとりをとりもどし、児童・生徒に信頼されるように努めなければならないと思う。同時に、ゆとりができた時間をどう使うのがよいのか模索することも働き方改革の重要な要素であると思う。

地域の方々との連携

須賀川市立西袋第一小学校 森藤 雅之

日頃より校長会の先生方はじめ関係機関の皆様方には温かなお声をかけていただき感謝申し上げます。

本校での勤務が2年目となり地域の方々の様子がようやく分かってきたところです。執筆の機会をいただきましたので、地域の方々との連携について紹介いたします。

行政区長との連携

本校は5月に運動会を実施していますが、ここ数年は30℃を超える日が増えており、熱中症への対策が課題でした。学年主任から「児童席にもテントを設置できないか」との提案がされましたが学校のテントが4張しかなく「無理だろうな」と半分諦めていました。

P T A本部役員会で話題にすると森宿区が20張を所有していることが分かりました。早速、区長に話をしたところ、快くテントを貸して下さったので全ての児童席にテントを設置することができました。



西袋コミュニティセンターとの連携

本校から200m南に、西袋コミュニティセンターがあります。毎年4月、1年生の給食の配膳をコミュニティセンター利用者の方々の手伝ってくださっています。これは長年続いているもので、担任と子どもたちから大好評です。今年度のお手伝い最終日に子どもたちと給食を食べていただくよう計画していましたが、体調が思わしくないとのことで実現できませんでした。来年はぜひ一緒に食べていただきたいと考えています。

グループホームとの連携

学区内にグループホームすずらん日向があります。毎年その施設の介護長を招聘し、6年生を対象に認知症サポーター養成講座を開いています。この講座の目的は認知症に対する知識をもち、認知症の人と家族に手助けができる、認知症サポーターを養成することです。

本校は平成20年から6年生が継続して受講しているのですべて合計1,508名の卒業生が認知症サポーターとなっています。これは、須賀川市の認知症サポーターの20%以上を占めているとのことで、令和2年に日本認知症ケア学会より実践ケア賞を受賞しています。

地域住民と商業施設の方々との連携

本校は須賀川市の交通の要衝に位置しています。学区内を片側2車線の道路が縦横に走り、さらにICと高速バスの発着所があるので交通事故が心配されるところです。

こうした環境の下、保護者の皆様をはじめとする登下校ボランティアに加え、地域の方々が自主的に子どもたちの見守りをしてくださっています。

ある飲食店のオーナーは、朝、保護者が子どもを送る際に駐車できるように駐車場を無償で開放してくださっています。地域全体での見守りに感謝しているところです。

以上、4つの連携を紹介しましたが、学校が恩恵を一方的に享受するだけでなく、地域に恩返しできるように、職員と教育活動を進めていきたいと考えています。

「魔法のお茶」

須賀川市立仁井田小学校長 熊田 秀和

「校長先生、先に帰ります。」

ある日、出張から戻るとAくんからの1枚の書き置きが校長室の机に残されていた。鉛筆で書かれた子どもの文字は決して上手とは言えないが、彼の心が伝わってきた。

それから数週間経ったある日、泣きながら校長室に入ってきたAくん。「校長先生、ぼく帰りたい。ママに連絡して・・・。」「まあ、そこに座って落ち着こうよ。何か飲む?」「いらない。」自分の意が通らず、ちょっと意固地になってしまっている様子。それでも麦茶を持ってきて「麦茶、ここに置いとくね。飲みたくなったらどうぞ。」

しかし、Aくんの高ぶった感情はまだおさまらず。過呼吸を起こすかの勢いで泣きじゃくる。「ひと口お茶を飲んでごらん。冷たいよ。」促され冷たい麦茶をひと口・・・。少し落ち着きを取り戻し、迎えに来た担任とやり取りをしたが教室には戻れず、校長室で休むこととなった。そっとしておく、今日は疲れていたのか校長室のソファで1時間半の眠りについた。

給食の時間となり、迎えに来た担任に促され、何事もなかったかのように教室へもどっていく。「つらくなったら、またいつでもおいで。」「うん。」と頷き校長室を後にする。昼休みは、校庭でサッカーをして遊ぶ姿がAくんの姿が・・・。帰りには校長室の窓に向かって手を振って帰っていく。

毎日、校長室は千客万来。不登校傾向の子、長時間教室にいることが難しい子、校長室の歴代PTA会長の写真が見たくてたまらない子などが、入れ替わり立ち替わりやって来る。手ぶらでやってきて、たわいもない話をして満足して教室に戻る子、誰かとトラブルになったのか顔を真っ赤にしながら怒りを鎮めるためにやってくる子。みんな校長室のソファに腰をおろしたり寝転んだり・・・。

感情が高まっている子には、夏は冷たい麦茶、冬は暖かい緑茶・・・。これを“魔法のお茶”と呼ぶ。私が職員室に顔を出すと、何も言わなくても用務員さんや事務の先生など手の空いている職員がこの“魔法のお茶”を運んできてくれる。お茶をすすり、とりとめのない話をすると、「もう教室に戻ります。校長先生、またね。」とどの子も笑顔で去っていく。“魔法のお茶”は効果抜群である。この“魔法のお茶”には入れてくれた人の心がこもっている。

きっと校長室にやって来る子ども達は、それを敏感に感じとるのであろう。“魔法のお茶”を飲んでまた笑顔で教室に戻る子ども達。「苦しくなったらいつでもおいで・・・。心の休憩室へ。」





「みんなで作る学校」

須賀川市立長沼小学校長 河原田 哲哉

今から30年以上前に、私が福島市内の中学校に勤務していた時のことです。PTAの会合で、ある保護者が私に話したことが今でも記憶に残っています。それは、「何で、学校の先生はテストを難しくして子どものやる気を奪うんだ。」「大事なところをできるようにするためなら、テストに出るところを教えて、みんなが満点を取れるようにしたらいいじゃないか。企業で言えば、お客は保護者で、商品は子ども、先生は生産者になる。先生は、大切なことをみんなできるようにして卒業させることが仕事ではないのか。」その時の私は、「この人は何を言ってるんだ。子どもは商品ではない。」と思いながら、うまく反論もできない自分に悔しく思った記憶が残っています。そもそも「学校とは？」と考える機会にもなりました。

私たち教員は、職業分類では「教育、学習支援業」と言われ、教育サービスを行う仕事です。しかし、教職員と保護者は従業員とお客さんの関係とは違うものと考えます。そして、子どもは「もの」ではないのです。例えば、児童生徒に向けて「お客さんがいらっしゃいますので、隅々まで掃除をして、気持ちよくお迎えしましょう。」などと放送される先生がいます。文化祭や学習発表会等の行事でも、保護者に見てもらうために、作品作りや発表を頑張ろうと話す光景がよく見られます。さらに、清掃活動も、清掃指導という目的はありますが、自分たちの学校という意識に基づいたものだと考えます。保護者についても、PTAがあり、奉仕作業をみんなで行ったり、行事に参加したりしています。これは、児童生徒、保護者はお客さんではなく、学校の一員であることを示しています。

今、子どもの減少、PTAの組織を解散した学校や都道府県が出てきたこと、保護者等の要望が多種多様になってきたこと、教員の精神疾患の増加や教員不足、教職員の働き方改革など、学校を取り巻く環境も変わってきています。だからこそ、「学校はみんなで作り、みんなで運営」し、未来を担う子どもを共に育てていくことが大切であると考えます。

本校の学校経営方針の一つに、「みんなで作る学校」を掲げて教育活動を進めています。教師、児童、保護者、地域が一体となって学校を運営していくことで、「地域に愛され、信頼される学校」となります。児童は保護者や地域との関わりの中で、豊かな学びや人間性を育むことができます。そのために、

- ①教職員——「グランドデザイン」へ位置づけ、職員会議等での共通理解
- ②児童——「協同的な学び」の推進、行事や体験活動を通じた豊かな心の育成
- ③保護者——保護者会や新入学児童保護者説明会等で、「大切なお子さんを、共に育てていきましょう。」を普及
- ④地域——情報発信、地域人材の活用、地域への貢献、丁寧で誠意ある対応

以上のことの実践に努め、教職員、児童、保護者、地域が一体となって、子どもたち一人一人を大切にす地域の学校にしていきたいと思ひます。



「感得することば」から大村はま先生に学ぶ

鏡石町立第一小学校 大河原 正道

特例任用校長も前半部分が過ぎようとしている。「来年度はもう一度教諭に戻って授業をするのもいいなあ」と、最近考えている。

須賀川市立第一小学校校長でご退職なされた吉田明宣先生が編集した「感得することば」を昨年いただいた。吉田明宣先生は、第一小学校校長の時に「感得することば」を教職員に折りにつけ印刷配布していた。私もノートにのり付けしたものを今でも校長室に置いている。ご退職後も教育に関することばを見つけて2023年に300ページ余りの「感得することば」を改訂版として発刊なさった。この本は、私にとって再度教師として頑張ろうと思わせるエネルギーを注入してくれた本である。もちろん大村はま先生の文章もたくさん収録されている。その中にあった大村はま先生について改めて知りたいという思いが強くなった。そこで、もう一度大村はま先生の書籍を読み返してみた。「そうか。そうだな。」という文章がたくさんあった。読んでいるうちに「こんな教育がしてみたい」という意欲がわいてきた。(ように感じる。)

その中からいくつか紹介したい文章があったのでご紹介したい。ちなみに以下の文章は『感得することば』にも収録されている。

1 「仏の指」

私が若い頃、奥田正造先生(茶道教育の第一人者)から聞いたお話です。「あるとき、仏様が道ばたに立っていらっしゃると、一人の男が荷物をいっぱい積んだ荷車を引いて通りかかった。ぬかるみがあって、車はそれにはまってしまい、男が懸命に引っ張っても抜け出せない。男は汗びっしょりになって苦しんでいる。

仏様がしばらく様子を見てらっしゃったが、やがて、ちょっと指でその車に触れられた。すると車はすっとぬかるみから出て、男はからからと車を引いて去って行った。」というお話です。奥田先生は「こういうのが一級の先生なんだ。男は御仏の指の力にあずかったことを永遠に知らない。自分が努力して、ついに引き得たという自信と喜びとでその車を引いていったのだ。」

このお話は日がたつにつれ私にとって深い感動となりました。もし、仏様のおかげだと男が知ったら、ひざまずいて感謝したでしょう。それも喜びだと思いますが、男が一人で生き抜いていく力にはならなかったでしょう。一人で生きていく自信、真の強さにはつながらなかったのではないかと思います。

私が子どもを教え、そのおかげで力がついたとわかれば子どもは感謝するでしょう。でも、「おかげ」と思っているうちは本当にその子の力になっているのではないのです。生徒が自分の力で頑張ってきたという自信から、生きる力をつけるように仕向けていくことが教師の仕事なのだと思います。

2 「裾を持ちなさい」

子どもの頃、私たちは浴衣を着て寝ました。朝、その浴衣をそのままにしておいてはいけません。たたんでおくのですが、私はいくらやってもきちんとたためませんでした。『もう少しきちんとしなさい』と言われないうちに、四苦八苦ししていたんです。でも、どうやってもうまくいかなかったときに、通りかかった母が、一言、『裾を持ちなさい』と声をかけてくれました。

浴衣には、両脇にわき縫いというのがあります。そこの裾を持ってから肩の方を持つとピンと長方形になります。(中略)母の一言で、たちまち私は浴衣をきれいに、きちんとたためるようになりました。

教師になって私は子どもたちに『ああしなさい。こうしなさい。』という立場になりました。そのとき、私は『きちんとたたみなさい』というのではなく『裾を持ちなさい』と言える教師でありたいと思っていました。『姿勢をよくしなさい』『よく読みなさい』というのではなく、自然にそうなるようにするのです。姿勢がよくないならば、自然にそうなるような一言をかけたい。小言のような指導ではなく、具体的で必ず成功できることを適切に指示できてこそ、教師ではないかと思いつつ暮らしてきました。

引用文献

『感得することば』教師として ちょっと立ち止まり 感得してみたいことば集

改訂版 吉田明宣編集

ちくま学芸文庫 大村はま 「新編 教えるということ」

ふるさとを学ぶ

天栄村立牧本小学校長 齋藤 真二

毎年、天栄村では小学6年生を対象に、天栄村の歴史や文化を学んでもらおうと「ふるさと学び教室」を行っています。今年も6月に6年生17名が参加しました。私も昨年から、天栄村のことをもっと知りたいと思い、一緒に参加させてもらっています。今年の内容は、「ノーザンファーム天栄」「ふるさと伝承館」「龍ヶ塚古墳」「涌井の清水」の4カ所を見学しました。

はじめに「ノーザンファーム天栄」を見学しました。広大な敷地には1200m周回コース、900m坂路コース、育成12厩舎(355馬房)、角馬場2面が設置されています。陸上競技場のトラックが400mですから1200m周回コースはどれだけ大きいかわかりません。子どもたちは、初めて見る「実際に競走馬が走る様子」や「聞こえてくる馬の息づかい」にとっても興奮した様子でした。私もめったに見ることができない馬の調教の様子を見ることができ、とても貴重な経験をさせてもらいました。昨年惜しまれつつ引退した「イクイノックス」もここで調教していたということを聞くと、「天栄村にはすごい場所があるんだなあ」と改めて実感しました。



ノーザンファーム天栄

次に、「ふるさと伝承館」です。古くより伝わる郷土の伝統文化を学ぶための「伝承館」と、郷土の歴史を通史的な展示で学ぶ「展示室」があります。現代に伝わる村の文化と伝統を次の世代へと受け継いでいくためのよい学習の場だと感じました。福島県重要文化財に指定された1300年前の銅製の印鑑「丈龍私印：はせたつしいん」も展示されています。



龍ヶ塚古墳にて

3カ所目は、「龍ヶ塚古墳(りゅうがつかこふん)」です。この古墳に葬られているのは、6世紀に現在の福島県中通り、会津地方を支配した豪族である石背国造(いわせのくにのみやつこ)第5世の建磐主命(たていわぬしのみこと)を埋葬した墓と伝えられています。古墳の大きさは、長さ36m、前方部幅約17m、後円部約14m、高さ約4mの前方後円墳で、県の重要文化財でもあります。県内で発見された古墳では、13番目の大きさだそうです。現在、塚上前方部に淡島明神(あわしまみょうじん)が祀られていると聞き、さらに神聖な気持ちになりました。

最後に、「涌井の清水(わくいのみみず)」です。途切れることなく湧き出す清水で、湧水量毎分2200ℓ、面積約500平方mとされています。魚も生息(大きなウグイ、主(ぬし)?がいました。)、昔から魚を捕ったりこの水を汚したりすると洪水が起きるとの言い伝えがあります。また、雨乞いの霊地でもあり、江戸時代中頃には大祈禱が行われた記録もあります。天然記念物、村指定の重要文化財にもなっています。



涌井の清水にて

今回はこの4カ所を巡って天栄村のすばらしさを再確認することができました。他にも天栄村には沢山の文化財や観光スポットがあります。さらには「天栄米」「ヤーコン」「天栄長ネギ」「2つの銘酒(廣戸川、寿々乃井)」などの名産品があるすばらしい所です。この豊かな環境で教育に携わることができて本当に幸せを感じています。これからも天栄村の子どもたちのために精一杯がんばっていきます。

『恕』

須賀川市立第三中学校 須藤 瑞穂

毎年夏休みに、実家の荷物を整理しています。今年は、私の名前が書かれた道具箱を見つけました。私の母子手帳、小さい頃の身体検査の結果、高校時代の調査書、中学担任のS先生からいただいた「恕」と書かれた小さな色紙、一番下には、小学校から高校までの通知票が入っていました。保存状態が良く、親の愛情を感じ、素直に感謝です。

当時の先生方の書いた通知票の文字はとてもきれいでした。今と違ってパソコンなどがない時代、当然手書きですが、一文字一文字丁寧に万年筆で書いてあり、間違った形跡がひとつもありません。先生方がいかに慎重に時間をかけて書いてくださっていたかが分かります。当時の先生方のご苦勞に感謝の気持ちで一杯です。その丁寧に書いてくださった所見を見てみると・・・

「発表力旺盛で意欲的に学習に取り組んでいますが、諸作業にもう少していねいさがほしいところです。」「全般に発表も多くよく考えていますが、そそっかしく間違いが多くなっているようです。」「学習中の態度が良く、発表も上手にできますが、早合点で失敗することがありましたので、注意しました。」「落ち着かない、そそっかしい、そんな様子が見てとれます。小学生らしいと思って読んでみると、5・6年の担任の先生からは、かなり厳しい所見をいただいていた。

「相手や場にふさわしい話し方ができないようです。」「書写力はありますが、文字が乱暴です。」「学習中の姿勢が大変悪いです。椅子にすわったり、足を上げたり無意識にやる悪い癖を持っています。必ず直しましょう。」「我ながら本当にかっかりです。この通知票を読んだ親も、さぞショックを受けただろうと思うと申し訳ない気持ちです。

ただ、中学2・3年生の時の担任S先生の所見は全く違っていました。「常にまじめな生活態度が見られます。学習面でも着実に努力しています。」「何事にも熱心でよく頑張っています。成績の向上も見られます。自信を持って取り組んでください。」「勉強に熱心でもなく、係活動もさぼりがちな私の通知票が褒め言葉で埋め尽くされ、こちらも驚きました。

私の通った中学校は、厳しい先生方が多く、毎日怒られはしないかとビクビクしながら学校生活を送っていました。しかし、S先生はいつも優しく、先生の周りは常に生徒で一杯でした。教員として郡山市の中学校に勤務した際、クラスの不登校生徒が、退職したS先生のいるサポート教室でお世話になりました。サポート教室に足を運ぶと、S先生が優しい表情で子どもたちと菊を育てていました。子どもたちに寄り添う先生と生き生きとして活動する子どもたちを見て、昔と変わらないS先生に感動しました。挨拶に行くと「明るく優しく思いやりを大切にする先生になりなさい」という言葉をいただきました。

生徒思いの優しいS先生のような教師を目指していましたが、「まだまだ先生の足下にも及ばない。」そんな感じがしています。

大東中学校の「不易」と「流行」を見据えて

須賀川市立大東中学校 安齋 博嗣

2023年4月より大東中学校に着任し、あっという間に1年半が過ぎてしまった。本校では全校集会のたびに、校歌を大東中生全員で歌唱する。1番～3番までの何れかを歌うのだが、2番3番はまだしっかり歌うことができない…。今年中には完全にマスターしたいものだ。

本年度、大東中学校では統合60周年記念式典を挙げる。新校舎ができて11年目を迎え、50周年式典から11年が経過した。10年刻みでの式典の実施はとても迷った。しかし、父母と教師の会・音楽体育後援会、そして同窓会役員の方々から、「この十年間にお世話になった皆様に感謝の思いを伝えるべきではないか」との意見が多く、迷いはなくなった。十年ごとに継続して実施できる形を考え、内容と予算をコンパクトに、実行委員会も立ち上げず、学校と父母と教師の会そして音楽体育後援会の三者で主催し運営する運びとなった。記念誌は8ページの見開きとなるリーフレットに。昨年度中にPTA文化教養委員会に作成を打診したところ、快くお引き受けいただき、本年度の委員の方々にも「広報の周年事業号を発行できるのですから」と幾度もお集まりいただいている。記念品はオリジナルのクリアファイルに。その図案は、式典2日後に行われる本校の文化祭である「絢爛祭」でプログラム・展示の役割を担う係の生徒たちが作成してくれている。周年事業のポスターも総合芸術部の生徒たちがいくつもの図案を考え、まもなく完成をし、地域の商店や公共機関に掲示されることとなる。

式典は、30分弱のオーソドックスな内容で進める予定だが、そのオープニングセレモニーでは、「古寺山自奉楽」が披露される。これは古くから大東に伝わる無形伝承の芸能で、三十三年に一度だけ奉納される謡と踊りである。これまで「古寺山並木」を守り続けてきたように、この芸能を伝承し続けているのである。また、式典後の記念公演では、朝の連続テレビドラマ「エール」の方言指導を担当した本校の卒業生、相樂孝仁さんが所属する劇団「殿様ランチ」による「軽い重箱」公演が予定されている。ご来場いただいた皆様には「大きな福」が訪れることを願って、川東にある大槻菓子店の「大福」を全員にお渡しする予定である。

9月に入り、「松明あかし」参加に向けた「松明」作成も始まった。昨年度までと同様に3年生が中心となって作成、2年生は「菰づくり」を行うが、本年度の松明でも5本を利用し、残りを次年度で活用することにした。1年生は松明を包む「菰づくり」に取り組む。また、本年度は大東の地元の竹を活用することにした。昨年度は「松明をもり立てる会」の竹刈り・運びに参加したが、あまりに体力的な負担が大きく、地元の皆様をお願いすることが難しいとわかったからだ。地元の竹林を確認に伺うと、竹の提供と今後の支援を快諾して下さった。茅も大東の休耕田から提供していただき、3年生が茅を集め、近くの倉庫を所有している商店さんに許可をいただき、そこで茅を乾燥させていただく。松明を五老山へ運ぶユニック車も地元の商店さんのご協力によるものだ。懸垂幕も総合芸術部が作成を始める。当日の応援合戦に向けても、絢爛祭が終わると3年生を中心に応援団の練習が始まる。昨年度同様、庭園保存会・区長会・同窓会・お二人の講師と、多くの力の結集により「松明」は五老山に立つのだ。

大東に育つ生徒たちが、今後も伸び伸びと活躍・成長できるためには、地域の方々のご支援や保護者の皆様のご理解とご協力は必要不可欠である。これからも地域に信頼される大東中学校であるために、「不易」と「流行」をしっかりと見極めて学校経営を進めていきたい。

「ありがとう」～“感謝の鏡中”

鏡石町立鏡石中学校 津金 光彦

わたくしが着任する前の鏡石中には、脈々と「〇〇の鏡中」が受け継がれていました。それは、「学びの鏡中」「あいさつの鏡中」「清掃の鏡中」「部活の鏡中」です。どれも理想とすべき鏡中であり、実現すべき鏡中像です。

しかしながら、これらに先行する「〇〇の鏡中」があつてしかるべきと思い、新たに設定したのが“感謝の鏡中”です。

「子どもたちが学校に来てくれること、学校にいてくれること」

「教職員が学校に来てくれること、学校にいてくれること」への感謝の気持ちが何よりも、“はじめ”にあるべきと感じたのです。

日ごろ、感謝の気持ちを表す言葉として使われる「ありがとう」。わたくしが大切にしている言葉の一つです。

「ありがとう」を漢字で書くと、「有り難う」となります。これは、「有」ることが「難しい」わけで、「めったにない」という意味になります。昔の人たちは、神仏の力によって奇跡のような恵みがもたされたとき、「有り難し、有り難し」と言いながら祈ったそうです。「ありがとう」は、「めったにありえないこと」に対して、感謝する言葉だったのです。そこから人に対しても、感謝の気持ちを表す言葉として使われるようになりました。

東日本大震災、新型コロナウイルス禍…あのとき、「あたりまえ」のことがいかに大切かを思い知らされたからこそ、今あらためて「あたりまえ」が、いかに有り難いことであるかを実感しています。

毎日、あたりまえに朝を迎えることができること、あたりまえに歩けること、あたりまえに学校があること、あたりまえに子どもたちが学校に来てくれること、あたりまえに先生方が学校に来てくれること、あたりまえに食事ができること、あたりまえに帰れる家があること、あたりまえに家族と過ごせること、あたりまえに「今ここに」生かされていること…。

あたりまえのことは、すべて奇跡であり、「有り難い」こと。だからこそ、日々の教育活動の中で、子どもたちにも教職員にも積極的に「ありがとう」を伝えていきます。最近では、朝、登校してくる子どもたちに声をかけると、「ありがとうございます」が返ってくるようになりました。まだまだ“感謝の鏡中”は、始まったばかり。たくさんの「ありがとう」が校舎内外にあふれる鏡中にすべく、日々精進していきます。



特別支援学級の子どもたちがプレゼントしてくれた絵と習字…「ありがとう！」